

# 探訪 北の風景 ②

## 4体の乙女・道東の四季像 市民運動が結実した幣舞橋

釧路市

萩本和之

数多くの映画や小説の舞台、演歌、俳句、短歌に歌われている釧路の顔・幣舞橋。その橋を一層輝かせているのは欄干の上で華麗な肢体を披露する4体の乙女の彫像。橋梁の彫像としては全国第一号の「道東の四季像」は38年前の1977年5月3日に革新自治体主導の市民運動の成果で完成。芸術性豊かな名橋に「夕日に浮かぶ四季像は絶好の被写体。観光シーズンになると、幣舞橋には国内外のカメラ愛好家や観光客らがびっしり並び、カメラの放列です」（伊藤豊・釧路新聞参与）という。

今年相次いで亡くなった政治学者、松下圭一、篠原一両氏が提唱した「市民を主人公にしたシビル・ミニマム（最低限必要な生活水準）」を理念に60、70年代各地に社会党中心の革新自治体が誕生した。

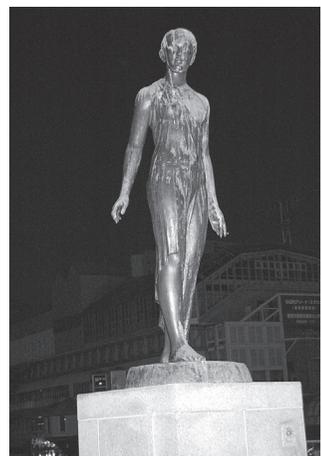
釧路では65年に山口哲夫市長が誕生。自衛隊入港阻止や工場誘致条例廃止などに取り組んだのをはじめ、市民集会や市長への手紙などを通じて現釧路市動物園（75年開園）や釧路湿原の保護、車いす利用者向けの歩道の段差解消工事などを展開した。

73年4代目幣舞橋の架け替え計画が浮上した際、開発局の事務的プランに「5代目は国道38号の延長としての発想を脱して、利用する市民の声を」と山口市長らは「待った」をかけた。この背景には山口市長の「街づくりは芸術」という思想があり、それを支えたのは市長の「懐刀」といわれた故富永巖さん（当時、企画室長）。富永さんらは実現に向けて東奔西走し、8回の市民討議を重ねて彫像設置の案をまとめた。

それに対して開発局は「前例がない」「予算もない」などと強く抵抗したものの、結局「経費は市が賄う」という条件で折れ、市のテコ入れで「彫像設置市民の会」が誕生し、市民らが募金活動を展開。必要経費を上回る5千万円を超す浄財が集まった。

一方、彫像は「道東の四季」をテーマに競作として、当時の具象彫刻界の気鋭だった舟越保武、佐藤忠良、柳原義達、本郷新の4氏（いずれも新制作派協会所属）を選定。くじ引きの結果、舟越は「春」、佐藤が「夏」、柳原「秋」、本郷「冬」となった。

欄干に女性の裸婦像、というユニークな構想に市民からは戸惑いや批判の声も上がり、開発局の架けかえプラン提示から4年間かかったものの、



未明の中で輝く舟越氏制作の「春」。「若葉が萌えいずる雪解けの季節」をイメージ



「さわやかな風を受けて羽ばたく若々しさ」をテーマに佐藤氏が制作した「夏」。夕日に海鳥も見入る

憲法記念日に雪化粧された橋梁上で盛大な除幕式が盛大に執り行われた。制作者の一人、佐藤氏は「橋の機能のほかに、あえてムダに取り組んだ釧路市民の勇気に敬意を表した」と評したという。これらの動きに、終始渋面を示してきた国などは、全国に先駆けて公明党を自民党側に引き寄せ、5カ月後の77年11月に山口氏の4選を阻止した。

その後、幣舞橋周辺は整備され、北側には複合商業施設「釧路フィッシャーマンズワーフMOO」や、美川憲一の「釧路の夜」（作詞・作曲は釧路出身・宇佐英雄氏）の歌碑が建つ河畔公園。南側のロー



釧路のシンボル、幣舞橋。4代目の風格とイメージを残し、かつ新しい美しさを追及している。奥の河畔には保存が決まった旧日銀支店。花時計や「まなぼつと」も



「寒さと冬をはねのけて春を待ち望む心」。夜のとばりの中で寒月を見上げる本郷氏の「冬」



「迫りくる厳しい冬に立ち向かう精神と緊張感」を表現した柳原氏の彫像「秋」。初冬の夕日を静かに臨む

タリー交差点上斜面には花時計。そして、高台のぬさまい公園内には展望台を完備した市生涯学習センター（愛称・まなぼつと）も。

南東河畔にある旧日銀釧路支店は「往時の北洋漁業の栄光をしのぶ遺産」として保存されることになったほか、イベント「大漁どんぼく」では釧路川に手こぎ舟が登場するなど釧路市の伝統と文化の象徴となっている。現在埼玉県に在住の山口元市長は「市民のロマンチズムをかき立て、釧路の発展に貢献できているなら、苦勞のかいがあつた」と喜んでいる。

△はぎもと かずゆき・大学非常勤講師▽